



【住 所】大阪府堺市北区長曾根町1179-3 【病院長】山田 義夫 先生

【病床数】678床(消化器内科 86床)

【内視鏡検査・治療総数】(平成22年度上半期4月~9月の総数)上部消化管内視鏡検査 2433件、下部消化管内視鏡検査 1261件、ERCP 141件、ESD 34件、内視鏡的止血術 81件

【スタッフ】医師 12名、内視鏡技師(臨床検査技師)1名、看護師 5名(内視鏡技師1名含む)

【保有機器】上部用内視鏡 15本、下部用内視鏡 10本、胆膵用内視鏡 5本、経鼻内視鏡3本、ダブルバルーン内視鏡2本、カプセル内視鏡(Given Imaging社製)

## 現代の医療ニーズに的確に応えるため 様々な取り組みをフレキシブルに実践する

### 働く人の心と身体を健康を支える 現代のニーズに合わせて進化した労災病院

大阪労災病院は、高度成長期に大阪の工業地帯で多発した労働災害に対応するため、労災病院設置に対する地元の要望の高まりと誘致活動のもと、昭和37年に開設されました。昭和から平成への時代変遷とともに労災病院の機能や役割も変化し、従来の工場爆発や転落事故といった労働災害や工場災害に対処する医療機関という特性から、現代ではメンタルヘルス、勤労女性の健康、さらに長時間超過勤務等の過重労働による健康障害など、近年の社会環境で働く人々が抱える心や身体への健康障害を研究し、これを予防、改善することを中心にした病院へと、その特性が変わってきています。このように時代のニーズに柔軟に対応してきた結果、現在では同院は南大阪地域の中核を担う病院へと発展し、また患者接遇に関するアンケートでも、医師、看護師ともに約8割の患者様から「満足」の評価をいただくなど、地域に密着した住民のための病院として機能しています。

### 患者様の負担軽減と臨機応変な対応を実現するため 「地域連携パス」を用いたインターフェロン療法を実施

大阪地区は肝炎ウイルスの汚染率が全国で最も高い地域の1つであり、肝疾患患者が非常に多い地域です。そのため同院では特に肝疾患の診断や治療に注力しており、日本消化器病学会、日本肝臓学会、日本消化器内視鏡学会の認定施設にもなっています。消化器内科では特に慢性肝炎、肝硬変、肝臓の早期診断と治療に力をいれており、全国でも先駆けて「地域連携パス」をインターフェロン治療に導入し、医師会を中心とした周辺施設との連携を図りながらB型、C型慢

性肝炎に対するインターフェロン療法を積極的に行っています。大阪労災病院副院長で消化器内科部長を務める吉原治正先生は、「患者様には当院で月に1回、かかりつけ医で月に3回のサイクルでインターフェロン療法を受けていただき、治療情報を記載した“地域連携パス”を持参いただいています。このパスには治療の過程や状況が詳しく記載されているので、患者様の情報を我々とかかりつけ医の先生が共有することができ、必要な措置を迅速に行える環境整備の一環となっています」とご説明になりました。

消化器内科では地域連携と役割分担を進めるため、かかりつけ医からの紹介による急性期患者を主に診療しています。このことから緊急対応も少なくありませんが、地域の医療機関から安心して患者様を任せられるよう、常時3名の医師がオンコール体制で待機し、緊急内視鏡にも迅速に対応しています。さらに、二次診療を中心としたより高度で難しい症例が集まってくることから、消化器内科では胃・食道を中心にESDなどの高度な内視鏡治療や、ダブルバルーン内視鏡やカプセル内視鏡を用いた最先端の小腸疾患に対する診断や治療も行っています。また、患者様にとって最善の治療方針を策定するために、外科とのコミュニケ

ーションを緊密にし、さらに毎月「キャンサーボード」を開催してそれぞれの見地から意見を出し合い、より良い治療方法を迅速に決定する環境を整えているそうです。



副院長 消化器内科部長  
吉原 治正 先生



消化器内科副部長 内視鏡室長  
小森 真人 先生

## ● 年々高度化する内視鏡診療において 内視鏡業務に特化した臨床検査技師が活躍

7対1看護職員配置基準の取得を目指す施設が増える昨今、看護師は病棟に優先的に配置される傾向が目立ってきています。その中で、臨床検査技師が内視鏡室のコメディカルスタッフの中心的役割を担う病院が増えてきました。その先駆者とも言える臨床検査技師の出野憲由さんは、「私を一人前に育ててくれた先輩看護師がいた時代から今に至るまで、内視鏡室はチームワークの良さが自慢です。内視鏡室の看護師は、コスト管理や新しい内視鏡看護を積極的に勉強し、その知識を現場に生かしています。また臨床検査技師は、看護師とは異なる視点を持って内視鏡室の業務にあたることで、他の検査技師には無いやりがいや楽しみを見出すことができていると思っています。例えば、胆膵処置で用いられるガイドワイヤーを皮切りに、ディスプレイ生検鉗子の導入など、現在では医療安全の観点から可能なものはすべてディスプレイを導入しています。現場の意見を改善につなげる風通しの良い職場環境が感染や安全対策を充実させると考えています」と話されました。このような「新鮮な目線で内視鏡室の職場環境を見直していく」姿勢から、臨床検査技師の内視鏡室への配置を模索している施設や、他施設で働く臨床検査技師から、出野さんに質問や問い合わせが寄せられる機会が増えているそうです。出野さんには、「私の経験を踏まえた情報を広く提供することが、内視鏡室の職場環境向上や内視鏡技師の存在価値の向上につながるのであれば嬉しい」と、今後の抱負を語っていただきました。



内視鏡室 臨床検査技師  
出野 憲由 さん

## ● 個人を尊重する風通しの良い職場環境が 若手医師の意欲向上と技術習得を育む

「若手医師も積極的に最新の手技を体験して技術を習得できる環境を整えたい」という消化器内科副部長で内視鏡室長を務める小森真人 先生の方針により、消化器内科では比較的早くから内視鏡検査や治療を学習する教育プログラムが実施されています。通常の内視鏡検査を学んだ後、若手医師は消化器内科1年目の6月頃から大腸カメラを経験し、9月頃からはERCP、2年目以降にはダブルバルーン小腸内視鏡や胃のESDへの取り組みを開始します。この教育プログラムは院外の意欲ある若手医師を刺激し、同院での勤務を希望する医師も多いそうです。そのため、消化器内科には業務や研修に積極的な若手医師が集まっており、若手同士で自発的に開催する勉強会なども多いそうです。その一例として、週に1度は処置具の使い方や特性などについて話し合う機会が設けられており、最近ではスネアリングの仕方やモノポーラスネアとバイポーラスネアの切れ味の違いなどについて、それぞれが普段の診療で得た知識や疑問を共有していました。小森先生は、「年齢の近い医師同士がライバル意識を持って業務に取り組んでいるので、切磋琢磨しながら能動的に知識や技術を習得しています。また、早い段階から高度な処置でも介助に携ってもらい術者と同じ経験を共有してもらっています。症例は厳選しますが、結果としてより早いステップで術者として高度な手技に取り組むことができるのだと思います」とお話になりました。内視鏡業務の経験が豊富で、特に処置具にも詳しい出野さんは、ときどき医師から質問を受けることもあるそうですが、「先生方は意識が高く自発的に勉強されているので、私はそれをサポートする立場に徹すべきだと思っています」とコメントされました。

このようにお互いの立場を尊重し、また個々の成長をサポートする環境であるからこそ、同院が患者様のニーズを的確に汲み取り、地域医療の中心的な存在として発展し続けているのだということが伺えました。



消化器内科・内視鏡室のみなさん